

の上、〈筑波山〉という表現は本来官人の持つ抒情発想の中にあるものであった。〈筑波の山〉の〈橋の下吹く風のかぐはしき〉は一番、官人家持の抒情発想に似ている。「恋ひずあらめかも」という二重否定的表現は手がこんでいる。家持に、三九一九鳴かずあらなくに、といった例はあるが、東歌に近似する表現は集中にない。さて以上、

妹が門いや遠そきぬ筑波山隠れぬほとに袖は振りてな
に始まって

東路の手児の呼坂越えて去なば我は恋ひむな後は相寝とも
恋ひつつも居らむとすれど木綿間山隠れし君を思ひかねつも

夏期セミナー発表要旨

古万葉の形成

高野 正美

卷一、二は資料の点で大きく二分され、その区切れは持統朝にある。これを仮に「古万葉」と名付け、その形成の過程を考えてみるとおおよそ次のようになる。

まず、形成段階で歌がどのように扱われたか、つまり採録の基準とでもいべきものを考えてみると、古万葉は由緒ある公的な歌の

などを都の抒情からの再構成ではないかと疑い、そして防人歌

橋の下吹く風のかぐはしき筑波の山を恋ひずあらめかも

とまた〈筑波山〉に返ってきた。あるいは東歌中、ただ一つの完了「ぬる」を持つている防人歌

己妻を人の里に置きおほほしく見つぞ来ぬる此の道の間

を入れてもよいかも知れない。これらに共通していることは東国歌の一特徴である方言、訛音が表面的には存在しないことである。これらの歌は官人抒情の再構成としての、あるいは官人抒情の東国歌ではなかったろうか。

集でもなければ、純粹に個人感情を詠んだ歌の集でもなく、この両者が合わさってある。さればとて物語性という点で統一されているわけでもない。また、歌道参考書という実用的な見方もあるが、当時歌道などなかったし、鎮魂といった古代的心性に求めることにも無理がある。当時鎮魂の場に歌が機能していた事実があったようだが、それは特定の「場」において機能したわけで、記録という行為は全く別物であったし、鎮魂を意図して記録されることなどありえなかったと思う。結局、文学性の面に基準を求めざるを得ないと考える。とすると「詩」が自覚されるようになったのは、大陸の文物に刺激を受けた旅人や憶良の頃であろうから「古万葉」の形成もほ

ばこの頃を想定してよいと思われる。

次にこの時期にほど遠からぬ時期に古事記や日本書紀が成立しているの、それらとの関連の中で「古万葉」の形成を考えてみると次のように考えられる。古事記の序で触れている諸家の帝紀や旧辞が事実と相違し、虚偽が加えられているというのは確かに一部に事実としてあったと思われるが、それは天武が八色の姓の制定により氏族再編成を企てた折に知ったものであり、虚偽はもっぱら氏族の出自についてであった。そこで虚偽と認定された氏族は正史としての書紀に記載されず削除されたと考えられる。記紀における始祖伝承の相違はここに起因するといつてよい。ここで削除の対象になったのは大和周辺にあっては弱勢の氏族であり、地方にあっては国造をはじめとした氏族で、彼等は中央の権威にすぎることそれぞれで地面を保ち得た氏族であったが、正史に登場しえないことにならず危機感をいだいていた。それは古来からの家柄でありながら中臣や忌部に圧倒され、没落の運命にあった稗田氏と同様であり、これら氏族の危機意識を基に古事記は成立したと考えられる。一方、書紀は現在の体制をより強固にし、未来への存続をはかって過去をつくり出すという形の書物として企画され、新しく時間意識を導入して編年体を以て構成され、資料の扱いでも異伝をも多く記すという形で全く違った歴史感覚の上に形成されたものであった。「古万葉」も形態の上ではこの書紀に近いことから、ほぼ近い時期に成ったと考えられ、これは歌の採録基準による時期の想定と一致する。

具体的にはこの時期を長屋王の政権掌握の時期と考えるが、それは次のような理由による。万葉集における賛歌の所在を整理してみ

ると三つの時期にまとまってある。第一には持統朝、次は長屋王政権下、第三には橘諸兄政権下であり、藤原政権下にはない。これは偶然ではなく、白鳳の皇親政治への回帰を願う時期にのみあらわれるといふことだろうと思う。当面の課題に即していえば、長屋王の場合、自らの時代を莊嚴に装うべく回帰が願われたといえるのだが、これは未来への存続を計っての現在の莊嚴であり、現在によって過去がつくりだされたといえる書紀の在り方と等しくある歴史感覚である。この意味で「古万葉」の編纂はこの長屋王の意図する所であったと思われる。その編者は長屋王に親しく、侍宴に侍ったり東宮侍講として推挙された人々のうち佐為王、紀清人、楽浪河内、刀利宣令、山田三方の如き漢籍の造詣に深い当代一流の知識人であり文人であったと思う。それは「万葉集」という書名そのものが、後の古今、拾遺、千載といった誰にも容易に案出できるものと違って、漢籍に通じた者でない限り不可能なすぐれた書名であること。三部立も同様に考えられることなどによる。ということは、「古万葉」はそれ自体独立して当初から現在の書名と部立を持った整備された歌集としてあったということである。こう考えない限り、編年体を導入して天皇代ごとにまとめ、詳細な注記や異伝を付した整った歌集の存在を理解することは不可能であろう。

（夏期セミナーの折には「原万葉の形成」と題したが、「原」ではふさわしくないので「古」に改めた。）